

## 新春挨拶

### 新年のご挨拶

一般社団法人日本作業船協会 会長  
齋藤 保



会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

天皇陛下が来年平成31年4月をもってご退位されることが決まりました。長きにわたり天皇皇后両陛下が国民の安寧を願い、全身全霊でご公務にはげまれるお姿に我々日本国民は多くの勇気と希望をいただきました。

平成の世を振り返りますと、情報通信技術を中心とした科学技術の飛躍的進展により我々の生活は大きく様変わりいたしました。我々は即時に世界中とつながる技術を手にし、いつでも欲しい時に必要な情報に触れることができる便利さを享受しています。昨年には我が国の衛星測位システム（日本版GPS）を実現するため、衛星「みちびき」が3機打ち上げられ、本年より4機体制で運用される予定であります。専用の受信機を使用すると地上での測位誤差は数センチにおさまるといわれており、この技術の活用により、i-constructionの精度は飛躍的に向上することが期待されております。

科学技術の進展の一方で、我々は地震、津波、集中豪雨などによる多くの自然災害にも直面いたしました。その結果、安全と安心の確保が重要なテーマであるとクローズアップされてきました。

作業船分野におきましても、東日本大震災や熊本地震などにおける支援出動の教訓を活かし、港湾業務艇に支援物資を搭載するなど、支援活動を前提に設計するようになりました。また作業船から飲料水や燃料油を被災地に供給するシステムに改造するなどの設計も行いました。

我が国の作業船は2017年現在で6,200隻強を確認しております。隻数の減少傾向は、やや落ち着いてき

たように感じられます。2015年から2016年に建造された主作業船は20隻余りで、グラブ浚渫船、起重機船、クレーン付台船などの起重機を搭載した作業船の建造が目立ちました。また、洋上風力発電設備を施工する作業船の計画もしくは建造が行われております。大規模ファーム建設により、作業船建造の動きが加速されることを期待しております。

浚渫船はこの30年間で約5割減少しており、2017年現在545隻が存在しています。浚渫船の半数以上を占めるグラブ浚渫船の平均船齢は20年強と高齢化しております。概算では、1隻あたりの平均浚渫能力は20年前から2割強の能力アップが図られておりますが、全船の浚渫能力合計は20年前の約6割に減少しております。

弊協会の自主研究においては、箱型作業船の係留に関する調査研究を実施して、作業時係留や現地待機係留における係留設備の設計の考え方をとりまとめました。また、港湾局所有の環境整備船をモデルにして、軽油とLNGの二元燃料化について港湾局技術監理室のご指導をいただきながら、調査研究をしております。

海外に関しまして、世界の主要浚渫会社の概要と進行中プロジェクトの調査を行いましたほか、造船所や機器製作会社の情報収集整理に取り組んでまいりました。これらの情報を整理し、機関誌に随時掲載してまいります。

本年も弊協会は、国内外で蓄積してきた技術と経験を活かして、作業船および関連技術の発展に寄与してまいります。会員の皆様、国土交通省ならびに自治体のご指導、ご支援を重ねてお願い申し上げます。会員の皆様にとりまして本年が良い年となりますことを祈念いたしまして、新年のご挨拶といたします。